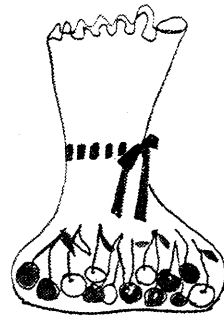


## 再び 保育の中の

### 小さなこと、大切なこと (4)

守 永 英 子



六月半ばの晴れた日の午後は、年長組の保育室は、ほとんどの子どもが庭に出ている。部屋の中は、がらんとしていた。おべんとうのあとの部屋を整えていると、N夫が、庭から戻ってきて、入口のところまで、「先生、先生」と気忙しく呼ぶ。「なあに」と答えると、「先生、大変だよ。一人を大勢でいじめるよ」と言う。急いで庭を見まわすと、庭の向うの隅に、プラスチックのバドミントンのラケットを、振り上げている、子どもたちの群がみえた。

事情が分らないままに、靴をはきかえて、現場に急いだ。近づいてみると、追われているのは、U男一人。攻撃をしかけていた子どもたち数人は、私の顔を見ながら、さっと山の方へ逃げて行こうとしていた。

U男は、何故か、時々、攻撃の対象となる。体も大きく、知的にも進んでいるが、自分本位な振る舞いが多いのであろうか。

私は、逃げて行く子どもたちを、手招きして呼び戻しながら、どのように切り出したものか、と考えた。

表われた行為をとがめることは容易である。しかし、それが、子どもの中にしみ込み、子どもの心持を変えていく布石となることは、むずかしい。

逃げた子どもたちが、呼ばれると、すぐに戻ってきたことは、私の気持を、幾分軽くしてくれた。私は、まず、子どもに、自分の気持をたどらせようと思った。

「どうして、私の顔を見て、逃げたの？」

子どもたちは、顔を見合わせたが、いつも素直なY夫が、間の悪そうな表情で、答えた。

「悪いことをしたから、叱られると思って……」

「悪いこと」って、どんなことをしたの？」

「一人を、みんなで、いじめたから」

思わず、けんかになった、というより、どうやら、承知してやり始めたようである。

「なぜ、みんなで、Uちゃんをいじめようとしたの？」

今までの冷静な空気を破って、Tが、憤慨に堪えない、といった顔で答えた。「だって、U男は悪いんだよ。この前も、まあちゃんを、けがさせたんだから」

私の心に驚きが走った。けがをさせたのは、もう何日も前のことである。しかも、U男が故意にしたことではなく、U男がこいでいたぶらんこの前へ、まあちゃんがころがったボールを追いかけてきて、ぶつかっただのである。

「あれは、Uちゃんがわざとしたのではないのよ。間違っ、そうだったのよ」

「間違っしたのは、許してあげなきゃいけないんだよ」と、横から、中立のE夫が、言葉をささむ。誰からも、反論は出ない。

今度は、M夫が、おさまらないといった表情で、口をとがらせた。「もっと、悪いこと



をしたんだよ。人が、いやがることをしたんだ」

M、U、H、Tたちは、帰り道が一緒である。その時のことらしい。M夫の説明によると、U男は友だちの名前を呼ぶときに、わざと、別の友だちの名前で呼ぶのだと言う。M夫も、「T君」と呼ばれて、それを、「いやだ」と言っても、やめないのだと憤慨する。

「どうして、そんなことをするの？」とU男に聞くと、「だって、おもしろいんだもの。『遊び』なんだ」と言う。そう言えば、以前にも、U男は、人が怒るのを試すようなことをして、「『遊び』で言ったことなんだ」と言ったことがある。それを思い出しながら、私は、U男に、きっぱりと言った。「言われた人も、楽しくなければ、それは、いい遊びではないのよ」

誰からも、反論はなく、双方が、認めたようであった。

Hが、「ハイッ」と手をあげて、発言を求めた。「みんな、仲よくした方がいいと思う」平凡ではあったが、Hの自発的な発言は、雰囲気や穏やかにした。続いて、A夫が、自分からU男の前に進み出て、「Uちゃん、ごめんね」と詫言した。そして、私の方をみて、にっこりとした。子どもたちの動きに、救われた思いで、私も、ほっとし、「Uちゃんだって、ちょっと、いけなかったのよね」と、言葉を添えると、U男も、素直にあやまった。平和な空気が流れたが、その中で、M夫だけが、不快な表情で取り残された。

「Mちゃんも、ごめんなさい」をすると、みんなで仲直りができるかしらね」という私の促しに、Mも、ためらいがちに、渋々と、U男にあやまった。

これで、無事に、事が終わったと思ったとき、私を呼びにきたまま、黙って一部始終を見ていたN夫が、口を開いた。「Mちゃんは、本当に、心からあやまったんじゃないよ。本当にごめんなさいをしたのなら、あんなに、こわい顔をしてないもの」

まことに、鋭い観察であった。私も、気持だけが、こだわりを残していることに、気づいていた。表情から、言葉と気持とのずれを、これほど、はっきりと感じとる力が、五才の子どもにあるということは、驚きであった。

日常生活の、細々しい事柄の中でも、子どもは、母親や保育者から、いろいろと鋭く感じとっているに違いない。

子どもが、日々出会う小さな事柄の、一こま一こまが、子どもの心に何を残していくか、子どもの感じとる力の鋭さを知ったとき、そのことの大切さと、むずかしさを、しみじみと思ったのである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)